

格助詞とゼロ代名詞*

本田 隆 裕

Suffixal Case and *pro*

Takahiro HONDA

1. はじめに

生成文法では、ヒトに生得的な言語能力が備わっていると仮定し、ヒトが文を生成する過程においてどのような計算処理（文法操作）を行っているのかを明らかにしようとしている。この計算処理の1つに「格付与」が該当すると思われる。名詞句が項として機能するには、主格（nominative Case）や対格（accusative Case）などの格が付与されていなければならないと言われている。あるいは、名詞句は解釈不可能な（uninterpretable）格素性を伴ったまま文を組み上げるシンタクス（narrow syntax）に導入されるため、派生の途中でこの解釈できない格素性に値が与えられなければならないと考えられている。

Chomsky (2000, 2001, 2008) など近年の生成文法理論の主流をなす研究では、英語の例 (1) と日本語の例 (2) では、どちらも同じ文法操作により名詞句に格が付与される（あるいは格素性に値が与えられる）と分析される。

- (1) John hit Mary.
- (2) ジョンがメアリーを叩いた。

上記の例において、JohnとMaryは人称・数などの解釈可能な ϕ 素性と解釈不可能な格素性を持っている。どちらの例でも、Johnはフェイズ主要部（phase head）であるCから解釈不可能な ϕ 素性を継承したTとの一致（Agree）という操作により主格の値を与えられ、Maryは同じくフェイズ主要部である v^* から解釈不可能な ϕ 素性を継承したVとの一致により、対格の値が付与されている。これらの一致により、T、Vもそれぞれの ϕ 素性に値が与えられる。つまり、名詞句とT、Vとの ϕ 素性の一致が名詞句の格付与を引き起こすという考え方である。

一方、辻子 (2015) はChomsky流の説明は英語のような一部の言語にのみ当てはまり、日本語のように ϕ 素性の一致を欠き、(3) のように主格が多重生起できる言語では、併合（Merge）される主要

部により名詞句の格の値が決まると主張している。

(3) 象が鼻が長い。

辻子によれば、日本語では、(i) 名詞句がVなどの語彙的主要部と併合する時は対格が付与され、(ii) *v*や*n*などのフェイズ主要部と併合される場合は主格（または属格）が付与される。このため、(3)の例では「象」、「鼻」がともに*v*と併合して、どちらも主格（ガ格）が付与されていると説明できる。さらに、名詞句は補部を持たないという分析を採用することで、(4)の現象を説明している。

(4) 太郎の 言語学 {の/*を} 研究

(4)において、「言語学」は「研究」の補部ではないため（語彙的主要部の補部ではないため）、対格（ヲ格）は付与されず、「研究」という名詞句の主要部である*n*と併合されるため、属格（ノ格）が付与されている。

このように、辻子の併合に基づく格付与の分析は、どの格助詞がどういった統語環境で現れるのかを正しく予測することができる。しかし、日本語は上記の例のように主格や対格が格助詞として形態的に顕現する場合もあれば、(5)のように格助詞の脱落形も観察されており、このような例について、辻子の分析だけでは説明することはできない。¹

(5) 太郎ちゃん {が/φ} お菓子 {を/φ} 食べちゃった。 (三原 (1994: 35))

興味深いことに、このような格助詞脱落は常に可能なわけではなく、(6b)のように属格（genitive Case）の場合は脱落が不可能なようである。

(6) a. [太郎の [友達との [ヨーロッパへの旅行]]] (斎藤 (2013: 5))
b. [太郎*(の) [友達と*(の) [ヨーロッパへ*(の) 旅行]]] が楽しかったようだ。

辻子の併合に基づく分析では、主格、対格、属格がそれぞれ同等に扱われているため、なぜ属格だけが脱落できないのかという点について明らかにする必要があると思われる。

さらに、(6a)の例の「友達との」という句に見られるように、日本語においては後置詞句が格助詞を伴うことが知られており、(7)のような例も観察されている。

(7) ここからが、富士山に登りやすい。 (斎藤 (2013: 5))

このように、後置詞句が名詞句と同じく格助詞を伴う理由についても明らかにする必要がある。

加えて、日本語の名詞句は常に音形を持つわけではなく、(8b)に見られるように、空範疇の一つであり音形を伴わないゼロ代名詞 (*pro*) が現れることもある。

- (8) a. 太郎_i は母親_j から自分_{i, j} の財布を受け取った。
 b. さっき太郎_i を見かけたけど、*pro*_i 自分_i の部屋で勉強していたよ。 (三原 (1994: 28))

(8a) の例から、日本語における「自分」の先行詞は主語でなければならないが、(8b) において「太郎」が「自分」の先行詞として解釈されるのは、音形のない代名詞類 *pro* が「太郎」を指す代名詞として主語位置に存在するためであると考えられている。上述のように、日本語の名詞句 (及び後置詞句) が主語として現れた場合、「が」が格助詞として名詞句に付くが、もし、*pro* のようなゼロ代名詞が日本語に存在するのであれば、(9) のような現象について説明する必要がある。

- (9) a. 先生 (が) 来た。
 b. *pro* (*が) 来た。

(9a) のように、音形のある名詞句が主語として現れた場合、格助詞の脱落は随意的であるが、*pro* が主語として現れた場合は格助詞脱落が義務的となる。先行研究ではこれまで特に指摘されていないが、格助詞は付随する名詞句と無関係に現れることを考えれば、なぜ音形を伴わない名詞句に格助詞が付くことができないのか明らかにする必要がある。

そこで本論文では、日本語の格付与の仕組みを解明するとともに、格助詞脱落の仕組みについても解明することを目指す。さらに、*pro* と格助詞との関係も明らかにする。

以下、2節では、Chomsky (2013) の構成素ラベリング (labeling) に基づいた斎藤 (2013) 及び Saito (2016) における格付与の仕組みを概観する。3節では、斎藤 (2013), Saito (2016) では取り上げられていない格助詞脱落について議論する。4節では、*pro* とその格付与について議論する。5節は結語である。

2. 日本語の格付与

2.1 斎藤 (2013), Saito (2016) の分析

Chomsky (2000, 2001, 2008) の理論では、1節で触れたように、格付与は ϕ 素性の一致と直結している。例えば、(10) のような構造において、動詞の目的語 DP への対格は軽動詞 *v* によって付与される。²

- (10) [_{VP} *v*_[- ϕ]] [_{VP} V DP [₊ ϕ]/[-Case]]

解釈不可能な ϕ 素性 [- ϕ] を持った *v* が、解釈可能な ϕ 素性 [+ ϕ] を持った DP を探索し、一致の

関係を結ぶ。この際、*v*の ϕ 素性にはDPの ϕ 素性の値が与えられる。また、*v*との一致によりDPの持っている解釈不可能な格素性 [-Case] に対格の値が与えられる。このような一致関係が成立するのは、一致の関係を結ぶ双方の要素が値を必要とする素性を持っていないとしないとする活性条件 (activation condition) を満たす場合のみであると考えられている。このように、Chomskyの理論における格付与では、 ϕ 素性一致が極めて重大な役割を果たしている。

これに対して、斎藤 (2013)、Saito (2016) は、日本語の格付与は英語とは異なり、 ϕ 素性一致とは無関係に行われていると主張している。その根拠として、(11b) のような項の省略は英語では不可能であるが、日本語では可能であることをあげている。

- (11) a. John always cites his dissertation.
 b. *But Bill doesn't cite [e] at all.

項省略がLFコピーにより解釈されるとするOku (1998) の分析に基づき、Saito (2007) は、(11b) の [e] の位置には、先行文脈のDP (ここでは, his dissertation) がコピーされると分析している。コピーされるDPは先行文脈で既に格付与されており、(12) に示すように活性条件が満たされないため、*v*は一致関係を結ぶことができないと説明している。

- (12) [_{VP} *v*_[- ϕ] [_{VP} V DP [₊ ϕ]/[+Case]]]

従って、 ϕ 素性一致を必要とする英語においては、(11b) のような項省略は不可能であるが、日本語では可能であることから、日本語に ϕ 素性一致は存在しないと言える。

加えて、(6a) や (7) で見たように、意味解釈が与えられ得る ϕ 素性を持たない後置詞句も格が付与されている現象は、日本語に ϕ 素性一致が存在しない根拠となると説明している。

斎藤はChomskyが示す一致の仕組みは日本語の分析には適用できないため、代わりに、常に解釈不可能な素性が探索子となり、値を付与する解釈可能な素性を探索することで、素性の値を得るというBošković (2007) の分析を採用している。Boškovićの分析に基づけば、例えば、解釈不可能な格素性を持った要素が、その探索領域にある格付与子を見つけ出すことで格付与が行われることになる。例えば、(13) に示すKuno (1973) の例に見られるような、多重主語文の派生を説明することが可能となる。

- (13) [_{TP} 文明国が [_{TP} 男性が [_{TP} 平均寿命が短い]]]

(13) は (14) のような構造により派生されると考えられるが、解釈不可能な格素性を持つ3つのDPが全てTを探索することが可能であり、これにより全てのDPに主格の値が与えられる。

- (14) a. [_a DP1_[-Case] [_β DP2_[-Case] [_γ DP3_[-Case] [TP vP T]]]]
 b. [_a DP1_[Nom] [_β DP2_[Nom] [_γ DP3_[Nom] [TP vP T]]]]

ただし、斎藤が指摘するように、(14)の派生はそのままでは採用できない。まず、(14)のような派生が可能であれば、事実反して英語でも多重主語が可能であることを予測する。また、(14)の派生は、Chomsky (2013) が示すラベリング (labeling) によれば問題がある。

言語において最低限必要な操作として、任意の2要素を併合 (Merge) する操作が考えられるが、ラベリングとは、この併合により形成された構成素の性質を決定する仕組みのことである。例えば、動詞とその目的語である名詞句が併合されて形成された構成素は動詞句となるように、語彙項目 (主要部) と句が併合された場合は、語彙項目がその集合のラベルとなる。しかし、このアルゴリズムでは、句と句が併合した場合のように2要素が識別できない場合、ラベリングが不可能となる。ただし、Chomskyは句と句が併合した場合であっても、両者に共有される素性があれば、その素性が全体のラベルになると提案している。従って、(14)において、DP3とTのφ素性が一致していれば、γのラベルは共有されているφ素性となるため、英語においても主語がTP指定部に1つは併合される事実が説明できる。一方、(14)において、DP1及びDP2とTの間にはφ素性一致による素性共有がなく、α及びβのラベルが決定できないため、英語において多重主語は不可能であると説明できる。問題は、なぜ日本語の場合は、(14)のような派生が許されるのかということである。

上記の問題を解決するために、斎藤は、日本語の文法格はラベリングにおいて句を不可視的にする機能を担うと提案している。例えば、(15)のαPのように格を伴う句はラベリングにおいて不可視的となり、(15)におけるγは句同士の集合であるが、βのラベルを受け継ぐことになる。

- (15) γ = {αP [Case], βP}

斎藤はこのようにラベリングにおいて句を不可視的にする「反ラベリング」素性として、「λ素性」を仮定している。このλ素性はいかなる要素も持つことができ、名詞句においては格として現れ、動詞や形容動詞など述語においては屈折として現れる。名詞句の格については、λ素性がTにより主格の値を与えられ、NまたはDにより属格を与えられ、Vにより対格を与えられることによって具現する。また、この反ラベリング素性がDPに与えられることにより、(14)におけるDPはラベリングにおいて不可視となるため、(14)のα、β、γのラベルはいずれもTPとなり、このため日本語では(13)のような多重主語が可能であると説明できる。

さらに、斎藤はこの反ラベリング素性が存在するため、スクランプリング (scrambling) など、句同士の集合である {XP, YP} 構造が日本語では現れやすいと主張している。

2.2 斎藤 (2013), Saito (2016) の問題点

斎藤の分析は、日本語において ϕ 素性一致が見られない点、項省略が可能である点、多重主語が可能である点、スクランプリングが可能である点について、全て一つの素性により説明した優れた分析である。

しかし、斎藤は (5) や (6) で見た格助詞脱落の現象については何も触れていない。格助詞脱落が常に随意的であるとすれば斎藤の分析を維持できなくはないが、(6) で見たように、属格のみ格助詞脱落が不可能である理由は説明できない。

また、英語において項省略が不可能である理由は活性条件により説明可能であるが、Bošković (2007) の分析が正しいのであれば、活性条件というものはそもそも存在しないことになり、英語の項省略が不可能な理由に対して別の説明が必要となる。斎藤 (2013) は活性条件を ϕ 素性一致に限定される可能性を指摘しているが、なぜ格素性には適用されないのか不明のままである。一方、Saito (2016) では、削除された構成素は主要部として扱われるというRichards (2003) の提案を受け、目的語の項省略では、 $\{V, H_{DP}\}$ というラベリングが不可能な主要部集合が形成されるため、項省略が不可能であると主張している。なお、Saitoも認めているように、動詞と目的語の間には ϕ 素性共有の可能性があり、この主張が成立するためには、主要部同士の素性共有によるラベリングは不可能であるという仮定が必要となる。

さらに、 λ 素性を反ラベリング素性としているが、反ラベリングがどのように引き起こされるのか不明である。

3. 提案

3.1 日本語の格助詞

そこで、本論文では、名詞句に λ 素性を仮定する代わりに、日本語の格助詞を伴う名詞句はDPとそれを補部を取る格助詞 (Narita (2014) に倣い、K (ase) と呼ぶ) から構成される (16) のような集合になっていると提案する。³

$$(16) \{DP_{[-Case]}, K_{[+Case]/[-case]}\}$$

なお、本論文では、三原 (1994) に従い、抽象格 (Case) と形態格 (case) を区別している。三原は、格助詞脱落形について、名詞句にCaseは付与されているが、caseが具現していない場合であると説明しているが、本論文では (16) のようにcaseはKが担い、格助詞脱落形はDPにKが併合されていない場合であると提案する。

また、本論文では、Chomsky (2015) におけるTやVと同様に、Kはそれ自体ではラベルを決定できない要素であると仮定しておく。従って、(16) の集合は、Kが主要部であるが、K自体が (16) のラベルを決定することはできない。ただし、DPとKがCase素性の一致を起こすことで、(16) のラベルはCase素性となる。

さらに、辻子 (2015) の分析に基づき、caseの値は一致ではなく併合により値が与えられ、併合する要素によって値が異なり、Tと併合すれば主格が、他動詞のV (v^* に選択されたV) と併合されれば対格が、NまたはDと併合されれば属格がそれぞれcaseの値として付与されると提案する。

ただし、(16) が (17) のようにTPなどとそのまま併合されることには問題がある。

$$(17) \{ \langle \text{Case, Case} \rangle \text{ DP}_{[+\text{Case}]} \text{ K}_{[+\text{Case}]/[-\text{case}]} \}, \text{TP} \}$$

(17) において、TPと併合しているのは、 $\langle \text{Case, Case} \rangle$ をラベルとする集合であってKではない。従って、このままではKの持つcase素性には値が与えられない。そこで、(16) はDPとKのCase素性の一致の後、(18) のようにKのcase素性のみが内的併合 (Internal Merge) により移動していると仮定する。

$$(18) \{ a \{ \langle \text{Case, Case} \rangle \text{ DP}_{[+\text{Case}]} \text{ K}_{[+\text{Case}]/[-\text{case}]} \}, [-\text{case}] \}$$

このような素性のみを移動する操作はChomsky (1995) など初期のミニマリスト・プログラムの研究では広く採用されていた。(18) の集合 a は、 $[-\text{case}]$ を主要部とする集合であり、ラベリングでは $[-\text{case}]$ がラベルとなるが、同時に $[-\text{case}]$ はすべてのコピーを含む要素でないためラベリングから不可視となっており、 a のラベルになることができない。従って、この矛盾により、 a のラベルが不可視的になっていると考えられる。⁴

3.2 日本語の主格、対格、属格

本論文では、日本語において、主格を付与するTと対格を付与するVはいずれもCase素性を持っていると仮定する。従って、(19) のように格助詞を伴う派生においても、(20) のように伴わない派生においても、格付与とラベリングの両方が可能であると考えられる。

$$(19) \text{ a. } \{ \text{TP} \{ a \{ \langle \text{Case, Case} \rangle \text{ DP}_{[+\text{Case}]} \text{ K}_{[+\text{Case}]/[-\text{case}]} \}, [-\text{case}] \}, \text{TP}_{[+\text{Case}]} \} \rightarrow$$

$$\text{ b. } \{ \text{TP} \{ a \{ \langle \text{Case, Case} \rangle \text{ DP}_{[+\text{Case}]} \text{ K}_{[+\text{Case}]/[-\text{case}]} \}, [\text{nom}] \}, \text{TP}_{[+\text{Case}]} \}$$

$$(20) \text{ a. } \{ \text{DP}_{[-\text{Case}]} \text{ TP}_{[+\text{Case}]} \} \rightarrow$$

$$\text{ b. } \{ \langle \text{Case, Case} \rangle \text{ DP}_{[+\text{Case}]} \text{ TP}_{[+\text{Case}]} \}$$

(19) においては、 $[-\text{case}]$ がTPと併合されることにより、主格の値を与えられる。なお、上述のように a はラベリングにおいて不可視であるため、(19) のラベルはTPとなる。一方、(20a) は句同士の集合であるが、DPとTPのCase素性の一致によりこの集合のラベルはCase素性となる。この場合は抽象格のみが付与されるため、形態格は現れず、格助詞脱落形が生じる場合の派生に該当すると考えられる。

なお、(20b) の集合には、さらに別のDPを併合することも可能であり、実際、話者によって容認度に差はあるかもしれないが、(21) のように格助詞を伴わない多重主語は可能である。

- (21) a. (今年は、) 太郎 (が) 成績 (が) いいよ。
 b. $\{ \langle \text{Case, Case} \rangle \text{ 太郎}_{[+\text{Case}]}, \{ \langle \text{Case, Case} \rangle \text{ 成績}_{[+\text{Case}]}, \text{TP}_{[+\text{Case}]} \} \}$

一方で、属格については、1節で述べたように、格助詞脱落は不可能である。

- (22) [太郎*(の) [友達と*(の) [ヨーロッパへ*(の) 旅行]]] が楽しかったようだ。 (= (6b))

これは、主格を付与するTと対格を付与するVのみがCase素性を持ち、NはCase素性を持たないため、(23) における α 及び β のラベルが決定できないためであると考えられる。

- (23) $\{ \text{DP}_{\alpha} \text{ DP}_{[-\text{Case}]}, \{ \beta \text{ DP}_{[-\text{Case}]}, \text{NP} \} \}, \text{D}_{[-\text{Case}]} \}$

仮に、(22) がDPとNPとの併合ではなく、(24) のようにDP同士の併合の場合は、DP間に共有される [-Case] 素性がラベルになるかもしれないが、すべてのDPの [-Case] 素性に値を与えることは不可能であり、いずれかの素性が値未付与となってしまう、派生が破綻すると考えられる。⁵

- (24) $\{ \alpha \text{ DP}_{[-\text{Case}]}, \{ \beta \text{ DP}_{[-\text{Case}]}, \text{DP}_{[-\text{Case}]} \} \}$

しかし、DPがKを伴う場合（つまり、属格が顕現する場合は）、(25) のように複数のDPがNPと併合可能である。

- (25) a. $\{ \{ \text{DP}_{[+\text{Case}]}, \text{K}_{[+\text{Case}]/[-\text{case}]} \}, [\text{gen}] \}, \text{NP} \}$
 b. $\{ \{ \{ \text{DP}_{[+\text{Case}]}, \text{K}_{[+\text{Case}]/[-\text{case}]} \}, [\text{gen}] \}, \{ \{ \text{DP}_{[+\text{Case}]}, \text{K}_{[+\text{Case}]/[-\text{case}]} \}, [\text{gen}] \}, \text{NP} \} \}$

Kから内的併合した[-case]素性はNPとの併合により常に属格の値が与えられ、また上述のように、この内的併合によりcase素性を主要部とする句はラベリングにとって不可視となるため、(25a, b) のどちらもラベルはNPとなる。

3.3 日本語の後置詞句と格

日本語の後置詞Pは格助詞と似た振る舞いをするが、本論文ではこの直感に基づき、case素性を持たない点以外はKと同じ性質を持つと仮定すると、後置詞句が主語となる (26) のような文は (27) のように派生されると考えられる。

(26) ここからが、富士山に登りやすい。 (= (7))

- (27) a. $\{DP_{[-Case]}, P_{[+Case]}\}$
 b. $\{<Case, Case> DP_{[+Case]}, P_{[+Case]}\}$
 c. $\{ \{<Case, Case> DP_{[+Case]}, P_{[+Case]}\}, K_{[+Case]/[-case]} \}$
 d. $\{<Case, Case> \{<Case, Case> DP_{[+Case]}, P_{[+Case]}\}, K_{[+Case]/[-case]} \}$
 e. $\{ \{<Case, Case> \{<Case, Case> DP_{[+Case]}, P_{[+Case]}\}, K_{[+Case]/[-case]} \}, [-case] \}$
 f. $\{TP \{ \{<Case, Case> \{<Case, Case> DP_{[+Case]}, P_{[+Case]}\}, K_{[+Case]/[-case]} \}, [-case] \}, TP_{[+Case]} \}$
 g. $\{TP \{ \{<Case, Case> \{<Case, Case> DP_{[+Case]}, P_{[+Case]}\}, K_{[+Case]/[-case]} \}, [nom] \}, TP_{[+Case]} \}$

(27a) において、DPとPのCase素性が一致し、(27b) に示すように、両者に共有されるCase素性がラベルとなる。次に、(27c) のようにKと併合し、KもCase素性を持つため、(27d) のようにラベルはCaseとなる。さらに、(27e) のように、Kの [-case] 素性が内的併合により移動し、(27g) に示すように、TPとの併合により主格の値が与えられる。

3.4 英語の格付与

ここまで、日本語の格付与を議論してきたが、英語の格付与はどのように行われるのだろうか。英語の場合、通常の名詞句には、属格の場合を除き形態的な格変化は見られないが、代名詞は格によって代名詞全体の形態が変化する。また、2.1節で見たように、英語の格付与には ϕ 素性の一致が深く関わっている。加えて、英語には日本語の格助詞に該当するような要素は存在しない。

以上の点を踏まえ、英語には日本語のようなCaseが存在せず、caseのみが存在し、DPがcase素性を持つと提案する。また、DPへの主格付与は (28) のように行われると提案することで、2.1節で見た活性条件とBošković (2007) の分析の両方を維持することができることを示す。

- (28) a. $\{T_{[-\phi]}, \dots \{ \dots, DP_{[-case]/[+\phi]} \}, \dots \}$
 b. $\{T_{[+\phi]}, \dots \{ \dots, DP_{[-case]/[+\phi]} \}, \dots \}$
 c. $\{<\phi, \phi> DP_{[-case]/[+\phi]}, \{T_{[+\phi]}, \dots \{ \dots, \overline{DP}_{[+case]/[+\phi]} \}, \dots \} \}$
 d. $\{<\phi, \phi> DP_{[nom]/[+\phi]}, \{T_{[+\phi]}, \dots \{ \dots, \overline{DP}_{[+case]/[+\phi]} \}, \dots \} \}$

まず、(28a) のような派生において、Tが ϕ 素性の値を持つDPを探索する。DPは [-case] を持ち、活性条件を満たすため、探索可能である。これによりTとDPの ϕ 素性が一致し、Tの ϕ 素性に値が与えられる。Chomsky (2015) によれば、Tはラベル決定能力がないため、一致するDPが指定部に併合されることを要求するため、(28c) に示すように、DPがTP指定部に内的併合される。これにより、(28c, d) のラベルは ϕ 素性となる。また、このTとの併合により、DPの [-case] は主格の値が与えられる。なお、case素性は探索・一致ではなく併合により値が与えられるため、活性条件は無関係である。従って、上記の分析では、英語の項省略が不可能な理由を活性条件に求めることができる。

さらに、(28d) のラベルは ϕ 素性であり、T (P) ではないため、(29) に示すように、別のDPが (28d) の構造に併合されても、そのDPのcase素性に値が与えられず派生が破綻すると考えられる。

$$(29) \{DP_{[-case]/[+\phi]}, \{<\phi, \phi> DP_{[nom]/[+\phi]}, \{T_{[+\phi]}, \dots \{ \dots, DP_{[-case]/[+\phi]}, \dots \} \}$$

従って、上記の分析により、英語で多重主語が不可能な理由を説明することができる。

4. 音形ゼロ要素と格

1 節で取り上げたように、日本語には音形を持たないゼロ代名詞 *pro* が存在すると考えられるが、(30) のように格助詞と *pro* は共起することはできない。

- (30) a. 先生 (が) 来た。 (= (9a))
 b. *pro* (*が) 来た。 (= (9b))

Saito (2007) は、*pro* について、項省略における省略された項と同じく先行文脈におけるLFコピー要素である可能性を示唆しているが、(30b) のような例は項省略とは異なる現象である可能性も同時に指摘している。2.1節で見たように、Saito (2007) は英語における項省略が不可能な原因として、項省略における項が既に格素性を付与されたLFコピー要素であることをあげている。

項省略の項と (30b) のような例における *pro* が同等のものかは不明であるが、LFコピー要素のように何らかの先行文脈が必要である可能性が高い。また、名詞句にとって格素性は解釈できない素性であり、LFでは削除されていると考えられるので、Saitoの分析のようにLFコピー要素は格を「付与されている」と分析するよりも格素性が「削除されている」と考える方が適切かもしれない。そこで、*pro* について次のような仮定を立てる。

- (31) *pro* は、格素性を持たない。

この仮定と、3.1節で提案したKの分析に基づけば、*pro* に格助詞を付けた構造は、(32) のような集合になっていると考えられる。

$$(32) \{_a \text{ } pro, K_{[+Case]/[-case]}\}$$

既に提案したように、Kはラベル決定能力を持たないので、併合する要素と素性の共有がなければならぬが、*pro* は格素性を持たないので、*a* のラベルを決定することはできない。従って、*pro* と格助詞は共起できないと考えられる。

では、格助詞が現れない *pro* を含む派生はどのようになっているのだろうか。(33) に示すように、

*pro*は何らかの述語の項として現れ、TP指定部へ併合されると考えられる。

- (33) a. $\{T_{[+Case]}, \dots \{pro, \dots\}\}$
 b. $\{_a pro, \{T_{[+Case]}, \dots \{pro, \dots\}\}\}$

ここで問題となるのは、(33b)において、*a*のラベルはどのようにして決定されるのかということである。Miyagawa (2010) は、英語などのインド=ヨーロッパ語ではCからTへ ϕ 素性が継承されるが、日本語のような言語では、Topic/Focus素性がCからTへ継承されると主張している。*pro*は何らかの先行文脈に基づく要素であるから、Topicに該当すると考えられ、(33)においてはTと*pro*の間にTopic素性の一致が起こっていると考えられる。従って、Tと*pro*の間に共有されているTopic素性が*a*のラベルになっていると考えられる。⁶

5. 結語

本論文では、日本語の格付与と格助詞について取り上げた。文法格を反ラベリング要素とするSaito (2016) の分析に基づき、格助詞はDP及びPPを補部を取るKであり、Kは併合に基づき値が決まる形態格素性 [-case] を持つと提案した。この提案により、主格・対格の格助詞脱落は随意的であるのに対し、属格の格助詞脱落が不可能である理由を明らかにした。また、この分析により、日本語では可能な項省略や多重主語が英語では不可能である理由も明らかにした。さらに、日本語の音形ゼロ代名詞である*pro*が格助詞と共起できない理由についても説明した。

[注]

* 本研究は、JSPS 科研費 17K13479 の助成を受けている。また、本論文の主張を明確化するための貴重なコメントを頂いた2名の査読者に感謝申し上げたい。

- 1 三原 (1994) に従い、格助詞脱落形を「 ϕ 」として表記する。
- 2 以下、解釈不可能な素性を「-」で表し、解釈可能な素性または値が与えられた素性を「+」で表す。
- 3 Narita (2014) が提案する「K」は格素性やQ素性、 ϕ 素性などの素性を担う機能範疇として仮定されているが、本論文では、Kについて格助詞に該当する要素であるということのみ仮定しておく。
- 4 Chomsky (2013) において、ラベリングが不可能なのは、 $\{XP, YP\}$ という句同士の集合か、 $\{H, H\}$ という主要部同士の集合であり、(18) はこのどちらにも該当しない。従って、[-case] をラベルとして決定できるが、同時に [-case] をラベルとして解釈できないため (18) はラベリングから不可視的になっていると考えられる。
- 5 (22) は後置詞句も併合されているが、後置詞句については3.3節で議論する。
- 6 3.2節の(20)のように格助詞脱落が見られる派生において、DPとTの一致が活性条件に違反しないのは、Tが解釈不可能なTopic素性を持つためであると考えられる。また、(33)における*pro*とTの一致についても、ここでは*pro*が何らかの解釈不可能な素性を持っており、*pro*とTがwh句とCのような関係になっているため活性条件に違反しないと仮定しておく。この点については、今後の課題としたい。

参考文献

Bošković, Željko (2007) "On the Locality and Motivation of Move and Agree: An Even More Minimalist Theory,"

- Linguistic Inquiry* 38, 589–644.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89–155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) “Derivation by Phase,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33–49.
- Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3–16, John Benjamins, Amsterdam.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 三原健一 (1994) 『日本語の統語構造』, 松柏社, 東京.
- Miyagawa, Shigeru (2010) *Why Agree? Why Move? Unifying Agreement-Based and Discourse-Configurational Languages*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Narita, Hiroki (2014) *Endocentric Structuring of Projection-free Syntax*, John Benjamins, Amsterdam.
- Oku, Satoshi (1998) *A Theory of Selection and Reconstruction in the Minimalist Perspective*, doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Richards, Norvin (2003) “Why There Is an EPP,” *Gengo Kenkyu* 123, 221–256.
- Saito, Mamoru (2007) “Notes on East Asian Argument Ellipsis,” *Language Research* 43, 203–227.
- 斎藤衛 (2013) 「日本語文法を特徴付けるパラメーター再考」, 村杉恵子編『言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約—日本語獲得に基づく実証的研究: 成果報告書 II』 1–30, 国立国語研究所／南山大学.
- Saito, Mamoru (2016) “(A) Case for Labeling: Labeling in Languages without ϕ -feature Agreement,” *The Linguistic Review* 33, 129–175.
- 辻子美保子 (2015) 「格と併合」, 藤田耕司・福井直樹・遊佐典昭・池内正幸編『言語の設計・発達・進化: 生物言語学探求』 66–96, 開拓社, 東京.

キーワード: 統語論、格、格助詞、ゼロ代名詞、ラベリング、後置詞